

せながむし

編集・古平町史編纂委員会
発行・古平町史編纂室
第二十二号（一日発行）
平成三年七月十日

再び明治初期の古平の人口

近藤 芳一

ここに次の文書がある。

松前江差沢茂尻町

與兵衛

せがれ 寅吉

妹 み弥

以上二人

西蝦夷フルヒラ場所江稼方

二相越者也

卯二月七日（慶應三年）

松前江差

沖口役所 印

慶應三年は、カムイ岬が自由航行になってから十数年後である。この二人以外にも多くの出稼人が、この地にやって来たのである。この文書は、沖口役所

が発行したいわば「出稼証明書」である。

次の文書も同じく和人地からの出稼人「証明書」で、所在地の名主が発行したものである。

生符町百姓

川村長左衛門

啗 人

右者此度西地シャコタン郡

江出稼二罷越候条相違無御

座候 以上

福山 名主

佐藤弥三郎 印

当時はこのように役所、又は名主の出稼証明書を懐にして、はるばる船でやって来たのだら

うと想像される。これら出稼ぎの人達はほとんど漁業関係の仕事に従事したであろうと考えられる。しかし、人口が多くなるに従い種々の職業の人達がやって来たようである。

明治四年（未六月）に初めて「戸籍調」が実施されている。それによると古平の戸籍上の人口は904人、出稼人532人（家数53）、一時出稼人508人（住宅を持たない出稼人）、土人（アイヌ）2人と記録されている。

古平の『米作』のはじまり

明治三十四年、榎本伝内（新潟県）・千葉松之助（青森県）・高橋与太郎（岩手県）の三人が、余市地方から品種は不明だがやや黒色をした種子を取り寄せ、三反歩ほどを共同で試作したのがはじめてだといわれている。そこは種田銀作の土地だったというが、カモイギ、ススキナイと、その場所はどうもはっきりしていない。

積丹半島へ鉄道敷設を

町会が建議案が採択される

大正五年（一九一六）五月、

北海道鉄道一千マイル記念祝賀会が札幌で行われたが、これが契機ともなつて、各地で鉄道敷設の運動が盛り上がった。

また、発展しつつあった国内の実情から、国としても新線の建設が必要な時であった。

大正九年六月九日、『鉄道二関スル建議案』が町会に提出さ

れ、全員一致で採択された。そして六月二十五日、三上良知町長は、鉄道敷設が「本町ノ發展上適切重要ナ問題ナルヲ認め」、鉄道敷設基礎調査委員を選定することを提案した。

早速、鉄道敷設基礎調査委員七名は、町会議員の選挙によつて選出され、委員長に齋藤兼太郎を互選した。（つづく）

五十八年前の

修学旅行「昭和八年」

古平小学校の高等科二年になつて、初めての修学旅行に参加した思い出がある。

何もかも物忘れする今日この頃であるが、埋もれた古井戸の水を汲み上げるようだがそのことを書いてみたい。



は偉く、特別な存在の人のよう
で距離があつたし、また、警官
がなにか恐ろしい人に見えた。
観音滝に行つて見ると壮大な感
じがし、①の公園は広々とした
大庭園に映つた。三十歳を過ぎ
た大人は、もうオッチャン？
に見えた。

函館に着いて、大きな宿に案内されたが、ただ大きかったというだけで、どんな宿だったのか思い出せない。きつと場末のガタガタの安宿だったのかも知れない。

られ、幾つかのトンネルを過ぎたが珍しく、その度にワァワァ声を出しては叱られたり、まさに田舎者丸出しの旅行だった。途中、大沼公園だったか下車して、駒ヶ岳や大沼、小沼などについての説明を聞いた。噴火の話もあつたようだが、悪ガキの我々には、風景よりも名物のフナのすずめ焼きを、なげ無しの小遣いで買って食べたことだけが記憶にある。

せつかくの修学旅行だったのに、写真は一枚も無い。当時、カメラなど一般の人が持っているはずもない。当然のことながら改めて時代を感じさせる。

宿の夕食がどんなだったか、入浴したことなども何一つ思い出せない。それでも、床に入ってから消灯するやいなや、枕の大砲があつちこつちで飛び交つて大騒ぎをしたことだけは強烈に覚えている。



つづく

郷社琴平神社祭礼順序

警護 警護

塩

菰

月旗 日旗

大櫛

神号旗 神号旗

猿田彦

供奉 庄几 供奉

祭官

青旗 青旗

獅子

太鼓

笛

赤旗 赤旗

祭官

黄旗 黄旗

随筆

「古平(三) 安さん」のこと

古川 羊我 雄



潜水艦に襲撃され、グラマンに機銃掃射され、B2に猛爆され、マラリヤには「三途の川」まで案内され、あげくの果てにはケツの穴に横穴ができるし、それを直しに入院したら、ご丁寧にもそこで肋膜炎に水溜りがあると宣告された。クタクタにはなったが、それでも戦争には勝ったような顔をして古平に帰って来た。

それを待っていたかのように、強引に役場に引きずり込んだのが鈴木安さんであった。私の親父は、昔から倅を遊ばせておくほどヤワではないが、三年間も戦って生きて帰って来た私を迎えて、「まあ、当分遊んでいろ」と、殊勝なことを言ってくれたから、こちらもその気になっていた。

その矢先のことだから、安さんから三回も四回も役場勤めを請われても、オイソレとはその気にならなかつた。命運尽きたのは、うっかり履歴書を渡してしまったのがそれ。即日役場と呼ばれ、最後の官選町長となつた藤田善平の前に引張つて行かれた。

威厳をつけるだけつけた町長（介次ページより）みんな仲が良く、安心して遊べた。この遊びにはいろんな動作が入っているが、すべて十三回くり返す。それをみんなが声を揃えて数えるが、その頃の友達が懐かしい。ガケは、自分たちで作るが、私のは父が作ってくれた。寝る時は布団の下に、登校の時は鞆の底に入れて大事にした。

が、「役場吏員というものは、町民の為に一身をなげうって尽くす覚悟が……」とやり出した。すぐに帰ろうとしたところ、私の気配を察した陪席の安さんの言葉で私は役場で働くことになった。

「あのなあ吉川君よ。この町長は少し短腹なところもあるが、これで案外いいところもあるんだ。それによ、もう少しで辞めるんだ。」こんな豪快な男に使われたら面白からうと、私は以後、安さんを「親分」と呼び、今でもそう呼んでいる。

た。ガケを持っていると、だれ彼となく、「遊ぼう」と声をかけてもらえるのが嬉しかった。せっかく父が作ってくれたガケを一本見えなくした時は、とても悲しい思いをした。懐かしい思い出のある『ガケ』を、どなたか作って下さいませんか。ボケ防止にひと役立ちそうなのですが。（終わり）

黄旗

神馬

黄旗

白旗

祭官

白旗

黒旗

副祭主

黒旗

神号旗

御輿

神号旗

護衛

台

護衛

立傘

祭主

騎馬

神楽

道具持

初穂箱

供奉

供奉

沢江・田口 甫さん記録
（時代は明治中ごろか）

昔のあそび 「ガケ」

池田 テール

長さ八寸(二十七cm)ほどの竹を割り、箸状のものを四本一組にした『ガケ』で遊んだ人たち、まだお元気で居られることと思います。

私たち子どもの頃は子だくさんの時代とあって、女の子は小さい弟妹の子守役だった。「シャッキ、シャッキ」という、このガケの音が聞こえてくるともう落ち着かない。「遊ばないかア——」と誘いが来ると、弟妹を連れて外へ出る。そこにはもう十人ぐらいも集まっていて、二列になってガケ

平に開拓使出張所が置かれて、古平・美国・積丹の三郡を管轄した。この年を古平町の開基とし、昭和二十九年(一九五四)で八十五周年を迎えることになったのである。この八十五周年を祝うということには、これを機に戦後間もない二十四年、壊滅的とも思われた大火から立ち上がり、以前

が始まっていた。「ひと投げ、ふた投げ」と威勢よく手早く十三回終えたら、そのガケを持って走る。目じるしの電柱などを片手で打って引き返して来る。次の人にまたガケを渡し、早く終わった方が勝ちというわけである。走る番になると、連れて来た弟妹をほかの人が見ていて、遊びの邪魔にならないように気配りをしてくれる。(介前ページ二段目へ)

- われた。
- ・開基八十五周年記念式
 - ・町民物故者追悼式
 - ・記念祝賀会
 - ・保安隊音楽隊演奏会
 - ・花火大会
 - ・町民演芸会
 - ・祝賀行進 保安隊音楽隊が先導、旗行列、仮装行列
 - ・HBC「歌うよ(うたうよ)」
 - ・NHK「のど自慢演芸会」
 - ・管内町村役場職員野球大会
 - ・各種展示会 町勢変遷、産業、衛生、美術品、生花、観光写真、統計図表

開拓使出張所が設置されてから

「今日日は、さんな日」

ここに八十五周年を迎える 「昭和29年」

開基八十五周年祝典歌

作詞 三川唯志

一、北海荒くけむるとき

明けし山河よ古平の

茨を越えてつらぬきし

理想讀えんこの朝

開基八十五周年

(二、三番省略)

明治二年(一八六九)九月、

蝦夷は北海道と名付けられ、古

また、この記念行事のため特に依頼した、吉田一穂作詞・八州秀章作曲の『古平小唄』と、若柳流若柳吉昭華の振付けによる舞踊が、祝賀会の席上で披露され参会者に感銘を与えた。

思わぬワープロの故障で発行が遅れ、「どうした」というお問合わせまでいただきありがとうございました。遅ればせながらひとことお詫びまで。

き が き

あ と が